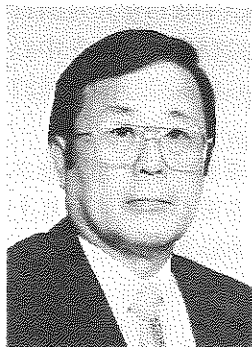


# 栃木県中学校長会報

## 〔役員所感〕

平成15年2月12日 発行 第98号  
栃木県中学校長会広報部

### GCR活動と学校評議員制



栃木県中学校長会副会長  
河内町立田原中学校  
校長 加藤 守 男

本校では、心の教育推進の重点活動として、平成11年度より「GCR活動」に取り組んでおります。

GCR活動とは、挨拶・清掃・読書の英単語の頭文字を合わせて、一つの合い言葉と

したものであり、前校長のアイデアでスタートしたものです。

- ・ Greeting (挨拶)
- ・ Cleaning (清掃)
- ・ Reading (読書)

挨拶は心の交流の始まりです。清掃は他への思いやりから発し、自らの心を磨くことにもつながります。読書は心を育む栄養素を提供してくれます。

4年間を経過しようとしている今、その成果もかなりあがってきていると自負しております。

特に挨拶については、地域や来客の方からお誉めの言葉もいただくようになりました。

ただ清掃に関しては、意識の向上はみられるものの実践はもう一つといった反省がありました。

そこで、「学校評議員会(平成13年度)」の基本テーマに「家族の一員としての自覚をどう育てるか―家事の手伝い等を通して―」を取り上げました。家庭内での役割分担(家事手伝い等)を積極的に奨励することにより、家族の一員としての自覚を育て、ひいては集団の一員としての自覚を育てることになり、このことが、学校での自主的・自発的な清掃活動にもつながるのではないかと考えたからです。

生徒の実態調査をもとに、様々なご意見を頂戴してまいりました。(年4回開催)

そのことを、朝会や始業式・終業式等で生徒に訴え、また学校だより等で、その都度保護者や地域の方々にご協力をお願いしてまいりました。

その結果、年度当初より手伝いを実践する生徒や家族の一員として何をなすべきかについて深く考える生徒が増えてきたことは事実です。そのことが一つの大きな成果であると考えております。

ただ、そのことが学校の清掃活動にうまく直結しているかとなると、まだまだ課題は残るとというのが現状ではあります。

今年度の基本テーマは「学校週5日制への対応(学校・家庭・地域)」に設定いたしました。

前年度の課題解決も含め、より多くのご意見をいただき、学校運営に役立てたいと考えているところ です。

### 旅の空で考えたこと



栃木県中学校長会副会長  
矢板市立泉中学校  
校長 関 恵 明

年末にオーストラリアのパース市に行って来ました。そのときの経験を学校経営や私生活に生かして行きたいと考えました。

まず一つ目です。パースに住む人達は、少々不便でも市の中心を流れるスワン川がよく見える風光明媚な場所に家を建てることを優先していました。ゆったりとした気分で、美しいスワン川を眺めて、心を豊かにし、明日への活力を取り戻すのだそうです。私も自然の美しさにふれたり、心にゆとりのある生活を大切にしていきたいと思いました。さいわい私は稜線の美しい高原山を眺めながら通勤していますので、早めに家を出て、眺めのよいところで車を止め、美しさに触れ、よい気持ちになって出勤するようにしたいものだと考えています。

(余計な情報…パースでは不動産の高騰を招き、今、10数年前の日本のような土地バブルが起きているそうです。)

二つ目です。パースに住んでいる日本人は、思っていたよりたくさんいました。ほとんどが20から30代の人でした。「これからの日本は豊かな国から普通の国になる。働く場所も少なくなる。外国に住む勇氣と外国語の会話力を持つことは大切だ。」と生徒に話したことがありますが、外国ぐらしに抵抗を感じない若い人達が着実に増えているなと思いました。今、学習意欲の低下が心配されています。狭い日本の中で何をしたいか、何が出来るようにしたいかを考えさせるのではなく、地球規模で夢や目標を持たせ、勉強に勤しむ生徒を育てたいと考えました。

三つ目です。パースだけでなくオーストラリア全体が多人種で構成されているので、互いに理解し合うことに気がつかっているということでした。少子化が進む日本は、将来外国からの移民を受け入れ、多民族国家になるということを予想している人もいます。今以上に、理解し合うことを重視した学校経営が必要であると思いました。

〔役員雑感〕

教育改革の流れの中で



栃木県中学校長会副会長  
野木町立野木中学校  
校長 池澤 渥

今、国際情勢も国内の様子も混迷の状態である。教育界も同様で、次から次へと改革の波が押し寄せてきている。

しかも、現場不在で、移り気で一貫性がないように感じる。ことが実に多い。また、教育現場としても、ややもすると改革の激流の中で、従来の教育の良さを見失ってしまうことがあるのではないかと危惧している。

例えば、総合的な学習に目を奪われ、学校行事や学級活動が片隅に追いやられてはいただろうか。今まで図り知れない教育効果を上げてきた部活動が敬遠されていないだろうか。興味関心を重視するあまり、嫌なものやらなくてもよいという意識を植えつけていないだろうか。支援の名のもとに、指導が不十分になっていないだろうか。個性や特色を重視するあまり、人として、日本人として共通にだれもが身につけなければならないことが疎かになっていないだろうか、というようなことである。

従って、教育改革を進める上で、校長として広い視野と洞察力、柔軟性、決断力、確固たる経営ビジョン等が求められているが、それとともに、いたずらに変化に流されず、足元をしっかりと見つけ、今まで取り組んできたことに自信と誇りを持ち、多くの先輩方が脈々と築き上げてきた伝統や校風を大切にしていかなければならないと心している。

また、これからの教育は目先だけではなく、将来を見据えた取り組みが重要であるといわれているが、今、目の前にいる子ども達から目をそらしてはいけないと思う。価値観が多様化し、教育に対する要望も複雑多岐に渡っている時代だからこそ、決断に迷ったときは、「子どもにとってどちらがよいのか」とシンプルに考え、決断しようと思心かけている。

最後に、私は今まで「善とは、あと味のよいことである」という簡単な倫理を、自分の言動のひとつのよりどころにしてきた。しかし、過去を振り返ってみると、あと味の悪いことがいかに多かったことか。

残された期間は1年余りと少なくなってきたが、これからは、あと味のよい仕事をし、あと味のよい別れをしたいものである。

第53回全日本中学校長会研究協議会  
島根大会に参加して

事務局長  
宇都宮市立旭中学校  
校長 小林 幸正

第53回研究協議会島根大会は、平成14年10月24日(木)・25日(金)宍道湖畔の松江市くにびきメッセを中心に開催された。出席者は全国から約2,200名(本県37名)であった。

大会は、今年度から新学習指導要領が全面实施される中、直面する諸課題並びに方策が大きく取り上げられるものとなった。以下、あいさつ、提案などを簡単にまとめてみる。

星正雄会長「いまの学力低下論は、時代に逆行している。そうした動きへの迎合は、子供たちから真の思考力、発想力のみでなく、学ぶ喜びを奪うもの。新学習指導要領が目指す「生きる力」は、目先の処世術や、すぐに役立つ公式的な方法論を身に付けることでなく、みずみずしい感性で科学や芸術を探究する力であり、課題解決のプロセスを進めるための真の学びの体得であり、自己実現である。その真価は、これから校長のビジョンと子供の変容で示すしかない。」

河村建夫文部科学副大臣「今後の施策は(1)確かな学力の育成、(2)豊かな心の育成、(3)英語教育の充実、である。」

大槻達也初等中等教育局教育課程課長「習熟度別指導を推進されたい。」

前田明永全日中生徒指導部長(全体協議会提案)「校長の自己評価で、自らの教育理念の下に計画が実施され、その理念が十分生かされた等、8つの視点で自らの取り組み姿勢を反省・評価するとともに、次年度の学校経営に反映させることが大切。」

安岡多実男高知県野市町立野市中学校長(同)「教師が、生徒は基礎学力を身に付ける権利をもっていると認識するところから、先の進展が見える。」

8会場に分かれた分科会では、提案された特色ある実践をもとに、熱心な協議が展開された。

アトラクションは、出雲の地にふさわしい石見神楽「大蛇」が、浜田市上府神楽社中により勇壮に演じられ会場から喝采を浴びた。

閉会式前、藤岡大拙氏の「瞥見・古代の出雲」と題した記念講演があった。

次回の全日中研究協議会は、隣県水戸市で平成15年10月23日・24日に開催される。

研究学校の発表概要

小川町立小川中学校長  
永森正俊

人権を尊重し、  
ともに生きようとする生徒の育成  
～道徳・学級活動を中心とした  
人権教育の取り組み～

1 はじめに

本校は平成13年度から14年度までの2年間にわたり、栃木県教育委員会から人権教育研究学校の指定を受け、人権を尊重し、ともに生きようとする生徒の育成をめざして研究と実践に取り組んでまいりました。

同和教育から人権教育となり、今まで以上にすべての学校すべての地域で人間尊重の精神を育成することが求められています。本校では、道徳・学級活動を中心に豊かな心の育成、良好な人間関係の育成をめざした指導の充実に取り組んでまいりました。

2 研究主題・副主題のとらえ方

(1) 「人権を尊重し」とは、

生徒が自尊感情を高め、お互いの人権や個性を認め合うことができることととらえた。豊かな人間性をはぐくむ教育を充実させることで、人権に配慮した行動を主体的にとることができる力を育てていきたいと考えた。

(2) 「ともに生きようとする」とは、

自分とは違う立場や考え方を受け入れ、相手の個性を尊重し、良好な人間関係が築けることととらえた。自分とは違う立場や考え方を尊重し合うことができれば、良好な人間関係を維持していくことができる。よりよい人間関係を育成するソーシャルスキルを生かして、自己理解・他者尊重の技能を身につけ、ともに生きようとする生徒を育てていきたいと考えた。

3 研究内容

【授業研究部】

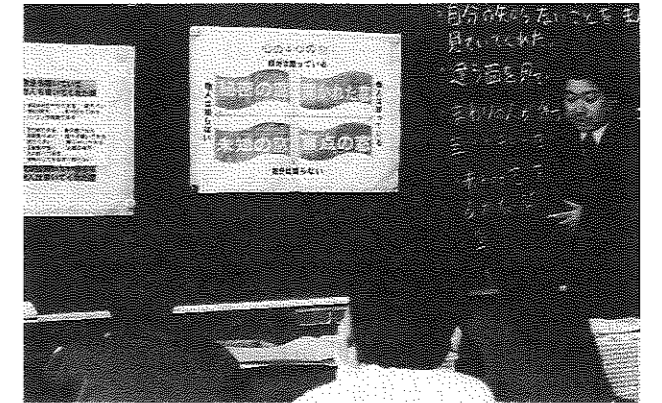
(1) 道徳

- ① 道徳と人権教育との関連を図った年間指導計画の見直し

② 豊かな心を育てる授業の工夫

(2) 学級活動

- ① 学級活動と人権教育との関連を図った年間指導計画の見直し
- ② 個性を尊重し、良好な人間関係の育成を目指した授業の工夫



〈研究授業の様子〉

【実践活動研究部】

- (1) 人権教育に視点をのせた実践活動計画と実践
- (2) 学級活動と体験活動との関連を図った指導の工夫
- (3) 望ましい集団づくりをめざしたスキル指導
- (4) 人権尊重の意識を高める活動

【調査・研究部】

- (1) 研修、啓発計画
- (2) 保護者への働きかけ
- (3) 指導の充実をめざした職員研修

4 研究の成果

- ・エンカウンター的手法を取り入れた授業展開を行うことで、生徒たちの学習意欲に高まりが見られた。
- ・望ましい集団づくりをめざしたスキル指導や自己理解、他者理解のためのエクササイズを通じた活動を進めることで、相手の気持ちや立場を考えた言動が多く見られるようになった。
- ・帰りの会を利用したスキル指導を通して、学級内においてお互いを認め合う機会を多くしたこと、自己受容が進み自尊感情の高まりが見られた。

5 終わりに

以上、研究の骨子を述べさせていただきました。詳細については研究紀要をご覧ください幸いです。

## 研究学校の発表概要

黒磯市立黒磯北中学校長  
井上 敏 和

### 総合的な学習の時間を中心とした 生徒一人一人の コンピュータリテラシーの育成

#### 1 はじめに

本校では、平成11年度に文部省から「マルチメディア活用学校間連携推進事業」の指定を受けた。これを機会にこれまで検討をしていた「総合的な学習の時間」の取組を生かし、「総合的な学習の時間を中心とした生徒一人一人のコンピュータリテラシーの育成」としてテーマを設定し研究を開始した。

実際には、コンピュータのハード面が整備された平成12年度の1学年から「総合的な学習の時間」を教育課程に組み入れ、13年度は1学年と2学年で、そして今年度から全学年で実施している。

本校の方針として、総合的な学習の時間のメインテーマを「食と健康」としているの、その課題解決活動の過程で、生徒一人一人のコンピュータリテラシーの育成を図りながら進めていき、最終的には、個人テーマに基づく課題学習の結果をホームページ及び他の方法でプレゼンテーションができることを目的としている。

#### 2 研究の実際

##### (1) 1学年

- ア 「食と健康」の資料をもとに学習の展開
- イ コンピュータリテラシーの育成  
パソコン等の操作方法、ワープロソフトの使用方法、表計算ソフトの使用方法、プレゼンテーションソフトの使用方法、インターネットの使用方法、デジタルカメラの画像取り込み方法等
- ウ 中間発表は11月の学校祭での学年発表と併せて
- エ 最終発表は3月のパワーポイントを使っての学年内発表会（保護者にも開放）

##### (2) 2学年

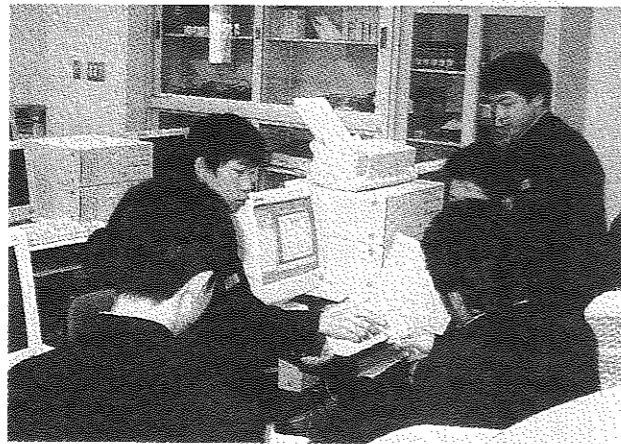
- ア 「食と健康」に関して、様々な情報を集め、地域の協力を得ながら、身近なこととして身につけられるように学習を展開する。

- イ コンピュータリテラシーの育成
- ウ 地域からの情報収集、学校栄養士訪問
- エ 学校祭での中間発表（紙上発表）
- オ 最終発表2月はパワーポイントを使っての学年内発表（保護者にも開放）

#### (3) 3学年

- ア 個人テーマに基づいた課題解決の過程において、それまで身に付けた技能の習熟を図るとともに、活動の結果をホームページ、または、他の方法で発表する能力を高める。

- イ コンピュータリテラシーの育成  
ホームページビルダー使用方法等
- ウ ホームページの作成・発表



#### 3 今後の展開

##### (1) コンピュータリテラシーの育成について

生徒達は、2年間の学習で、コンピュータに関する基本的な使い方はできるようになってきた。

インターネットでも自分の知りたいこと・探したいことを自分で検索し、学習に生かせるようになってきた。今後、ホームページを作成し、メールを使って情報のやり取りをするような外部に向かって情報を発信するために必要な指導（ネチケット等）を、重点的に授業に組み入れていく必要がある。

##### (2) システムの活用について

昨年度テレビ会議システムを使って県内の学校とALTによる英語の遠隔授業を行った。しかし、画像の室があまり良くなく、音声も鮮明でないためチャットによる交信をしないと内容がよく伝わらなかった。このシステムの有効な活用方法を考えていく必要がある。

前年度は、「総合的な学習の時間」をメインにインターネット等を活用したが、教科での活用も検討していく必要がある。

## 平成14年度 各専門部活動報告

### ◆ 総務部

部長 柿崎 龍夫（宇・陽北中）

今年度の各種要望書、次年度の運営方針、活動の重点等の策定に当たり、総務部会で原案を十分に練り、事務局と協議を重ねながら進めてきた。

- 1 第1回部会（4月23日）  
役員選出、事業計画等の協議  
・部長 柿崎 龍夫（宇・陽北中）  
・副部長 江面 一雄（河・古里中）  
副部長 中沼 利栄（鹿・北中）
- 2 義務教育振興協議会要望書起草委員会への意見集約（6月・7月・9月）
- 3 第2回部会（7月8日）  
平成14年度県中学校長会の要望書案の策定  
要望書の項立てと要望内容の検討
- 4 県教育委員会義務教育課との懇談会（8月19日）  
小学校長会と中学校長会が合同で、各理事が要望内容について説明し、それに対して義務教育課が対応
- 5 第3回部会（9月24日）  
平成15年度の運営方針・活動の重点等案の検討
- 6 知事部局、県議会関係者等への要望活動（9月）
- 7 各地区での要望活動（9月、10月）
- 8 第4回部会（1月）  
平成15年度の運営方針・活動の重点等案の策定
- 9 理事・協議員会に運営方針・活動の重点案を提案し決定（2月）

### ◆ 調査部

部長 定岡 明義（宇・陽西中）

調査部は、全日本中学校長会教育情報部の依頼による、平成14年度「中学校教育に関する調査」を実施し報告しました。

ここでは、その一部を関東甲信越地区について次表にまとめ掲載します。

なお、本県の調査にあたっては、県教委義務教育課に協力いただいたことを申し添えておきます。



項目	栃木	東京	神奈川	千葉	埼玉	茨城	群馬	山梨	長野	新潟	備考	
校長の定年前勤契	50	45	45	54	50	50	40	50	50	50	何歳から	
校長の再雇用期間	1	5	1	1	5	5	—	1	1	1	最長年	
中学教諭月額	初任	20	20	20	20	20	20	20	20	20	単位・万円	
	10年	32	33	32	32	30	32	32	30	29		30
	20年	41	42	42	42	40	41	41	40	40		41
中学教員1人の旅費	98	52	57	64	58	72	90	91	73	75	単位・千円	
教諭の同一校勤務	一般	10	8	10	7	10	6	8	6	9	上限年	
	新採	4	4	10	5	5	6	5	2	3		3

### ◆ 研修部

部長 犬塚 恒士（宇・城山中）

- 1 平成14年度研修部会  
組織検討 4月23日 研修部協議  
第1回 5月28日 組織確認・事業計画検討  
第2回 7月25日 研究大会基本計画検討  
第3回 8月26日 研究大会運営計画検討  
研究大会 9月6日 研究大会開催  
第4回 10月21日 H.15重点課題検討  
第5回 12月13日 集録作成・重点課題検討  
第6回 1月 集録確認・重点課題作成
- 2 平成14年度研究大会（9月6日）  
(1) 研究テーマ  
「〔生きる力〕をはぐくみ、新しい時代を拓く心を育てる中学校教育」  
(2) 全体発表・分科会  
第1分科会 — 「意識改革・資質向上」  
国本中 中山 一郎 校長（宇河地区）  
第2分科会 — 「体験活動を通じた心づくり」  
七合中 大森 幸子 校長（南那須地区）  
第3分科会 — 「学校・家庭・地域との連携」  
南犬飼中 長嶋 憲介 校長（下都賀地区）  
(3) 講話  
演題「子どもの成長と教師のかかわりを考える」  
講師 群馬社会福祉大学教授 大場 敏治氏
- 3 平成15年度の方向  
(1) 重点研究課題  
全日中等の動きを勘案し、主題・重点活動について検討。原案作成。  
(2) 平成15年度研究大会（案）  
・期日 平成15年9月12日（金）予定  
・会場 栃木県子ども総合科学館  
・提案担当地区 — 上都賀・塩谷・那須地区

◆ 事業部

部長 中山 一郎 (宇・国本中)

平成14年12月12日(木)、教育会館大会議室において、栃木県教育委員会福利課職員を講師に招き、事業部主催による栃木県中学校長研修会を下記のように開催した。約70名の参加であった。

主 題 「退職後の生活設計について」

日 時 平成14年12月12日(木) 13:00~16:00

場 所 栃木県教育会館3階 大会議室

1 開会のことば (中山 一郎) 進行 (齋藤 雄介)

2 あいさつ  
・栃木県中学校長会 会長 谷島 利康  
・栃木県教育委員会福利課課長 早瀬 誠一 様

3 講 話  
ア 医療保険について  
共済給付担当事務次長 葭田 昌 様  
・退職後の医療について  
・任意継続組合員制度について  
・継続医療制度について

イ 退職手当について  
福利厚生担当課長補佐 浜野久仁子 様  
・退職手当について  
・退職手当の算出について  
・各種の税について

ウ 年金制度について  
共済給付担当主査 齋藤 恭一 様  
・退職共済年金の内容と仕組みについて  
・退職共済年金の支給について

エ 教育福祉振興会 退職者部会について  
退職者部会担当班長 手塚 保雄 様  
・退職者部会について  
・退職者部会の加入の仕方について

オ その他

4 質疑応答

5 閉会のことば (佐藤 勇治)

退職金や年金の仕組みがなかなか難解なところもあったが、おおむね理解ができたようであった。

また最後の質疑でも、質問がいくつも出され、閉会の後も残って講師陣に質問をする会員の熱心な姿も見られた。

◆ 広報部

部長 橋 本 忠 良 (河・南河内中)

平成14年度栃木県中学校長会の会報発行に当たっての広報部の構想、部会の開催、会報の内容等は、次のとおりであった。

1. 平成14年度・会報の構想

- (1) 会報は年2回発行する。(97号、98号) 内容はほぼ従来どおりとする。
- (2) 専門部については、前期号(97号)に活動計画を、後期号(98号)に活動報告を掲載する。
- (3) 97号、98号ともに8ページ編集を原則とする。
- (4) 最後のページに「編集後期」を載せる。部長が執筆するものとする。

2. 部会の開催

- 第1回 平成14年4月24日(火) 県教育会館。本年度役員決定、編集方針等について協議した。
- 第2回 平成14年7月9日(火) 南河内中学校。会報97号、98号の内容、執筆者の選定、原稿依頼、今後の課題等について協議した。

3. 会報の発行と主な内容

- ・第97号 平成14年9月6日発行  
内容 会長あいさつ、役員所感、退任に当たって、各専門部の活動計画、新任校長の一言、私の朝会訓話等
- ・第98号 平成15年2月12日頃発行予定  
内容 役員所感、全日中(青森大会)の報告、研究学校紹介、各専門部の活動報告、海外教育事情等

4. その他

予算の都合でこれまでの12ページから8ページの会報となった。

研究学校の紹介では、これからの教育で重視されるであろうと思われる「人権教育」と「マルチメディア活用」について、それぞれ小川中学校と黒磯北中学校の研究について御執筆いただきました。ぜひ、参考にさせていただきたいと思っております。

◆ 進路対策部

部長 戸 村 武 夫 (那・金田南中)

今年度の研究テーマ「中学校進路指導の適正な推進と高校教育への提言」にそって、3回の研修会を開催した。概要は次のとおりである。

- (1) 第1回研修会 平成14年7月9日(火)
  - ① 今年度の事業計画の確認及び昨年度の研修のまとめの確認と今後の課題について
  - ② 次回10月に開催予定の私立中・高等学校連合会代表との懇談会について、運営方針等を細部にわたって検討するとともに、協議事項については県内13地区の各中学校の要望等をアンケートによって十分に吸い上げられるようその様式等について話し合った。

(2) 第2回研修会 平成14年10月22日(火) 「私立中・高等学校連合会代表との懇談会」

- ① 私立高等学校の教育について
- ② 入学者選抜について  
懇談会を通じて各地区からの入試に関わる事項等について要望した。また、今回の懇談会も私立高校と中学校の互いの立場を理解することのできるよい機会となった。

(3) 第3回研修会 平成14年12月5日(木)

- ① 前回の懇談会のまとめ
- ② 県立高等学校への要望について  
各地区から要望が出されている高校入試改善内容等について協議した。次のようなことをまとめた。  
・推薦入試の在り方、合格内定連絡方法の在り方、一日体験学習の申し込み方法等の在り方等の意見が出された。これらをまとめ、課題として次年度に引継ぎたい。

◆ 生徒指導部

部長 神 長 利 光 (河・上河内中)

1 研究概要

【研究課題】

- ・いじめ問題及び不登校等学校不適応生徒への適切な指導と対応
- ・学校の危機管理

(1) 第1回研修会 4.23(火) 教育会館  
今年度の組織作りと事業計画作成

(2) 第2回研修会 10.22(火) 教育会館  
各校の実践事例の発表と協議

2 第2回研修の紹介

研究課題について、各校の実践事例を発表し、併せて情報交換を行いながら課題解決に役立てることにした。

【実践例】

- (1) 校内指導体制
  - ・生徒指導全体計画の共通理解
  - ・人間関係を育む指導の充実
  - ・人権・生命尊重に関する授業と学校行事の実践
  - ・教育相談の充実
- (2) 各種連携
  - ・家庭との連携
  - ・各種専門機関との連携(総合教育センター等)
  - ・スクールカウンセラー、心の教室相談員、学校支援員、民生委員との連携
- (3) 生徒指導に関する特色ある教育活動の実践
  - ・中学校進学への不安を解消する目的で、中学

1年生(各小学校の先輩)が小学校(6年生)へ出向き、中学校生活を説明する。

- ・「あいさつ運動」「声かけ運動」の実施
- (4) 学校の危機管理
  - ・来訪者の確認、登下校時の安全確保体制づくり

◆ 修学旅行部

部長 真 壁 敏 夫 (宇・姿川中)

平成14年4月23日県教育会館において、専門部会を開催し、本年度の組織及び事業計画を次のように決定した。なお、本部会は従来から関東地区公立中学校修学旅行委員会及び全国修学旅行委員会とのかわりがあり、それらの研究団体との連携を図りながら活動してきた。

1 組 織

部長 真 壁 敏 夫 (宇・姿川中)  
副部長 小 堀 悠 次 (芳・逆川中)  
“ 田 中 耕 一 (下・小山城南)  
次 長 後 藤 明 (宇・雀宮中)  
地区運営委員会

2 本年度の事業概要

- (1) 6月7日~8日関修委総会並びに第1回研究協議会 (千葉市)
- (2) 6月23日県修学旅行専門委員会修学旅行部事業概要の説明会 (県教育会館)  
中学校修学旅行連合委員会 (大阪市)
- (3) 7月12日三地区総会
- (4) 7月18日関修委事務局へ「平成16年度修学旅行列車申し込み集計表」提出
- (5) 10月7日茨城県との輸送計画との調整 (宇都宮市)
- (6) 10月17日 第3回研究協議会 (東京)  
平成16年度輸送計画決定
- (7) 11月15日 第18回全国修学旅行研究大会 (さいたま市)  
栃木県校長58名参加
- (8) 11月29日「平成16年度修学旅行新幹線輸送計画書」を配布
- (9) 平成15年1月31日役員代表者会議  
年間行事活動報告と新年度対策 (東京)
- (10) 2月21日年間行事活動反省と新年度対策  
平成15年11月17日(予定)関東修学旅行研究大会栃木大会(プラザインくろかみ)開催の打ち合わせ

## 〔海外研修視察記〕

### オーストラリア・ヴィクトリア州の 教育から学んだこと

南河内町立南河内中学校長 橋本 忠良  
平成14年度教職員派遣研修（短期・栃木県第92団）の団長として、10月31日から11月15日まで、オーストラリア、ヴィクトリア州の教育事情を視察研修してまいりました。このような貴重な研修の機会を与えてくださいました独立法人教育研修センター、栃木県教育委員会、市町村教育委員会の皆様に対しまして、心より感謝申し上げます。

私たちは、メルボルンから北東に約240キロ離れたワンガラッタという人口約15,000の比較的小さな地方都市の、小・中・高校、養護学校などを視察してまいりました。

ワンガラッタという町は、ヴィクトリア州にあり、羊毛、酪農品、小麦、ワイン、タバコなどが主な産業とされています。製粉、毛織物、ワイナリーなどの工場がありました。

では、まず、初めに、ヴィクトリア州全体の教育について「ゴールバーン北東部教育事務所」での説明をもとに要点のみ御紹介します。その後、二つの中、高一貫校を御紹介したいと思います。

〔ヴィクトリア州全体の教育について〕

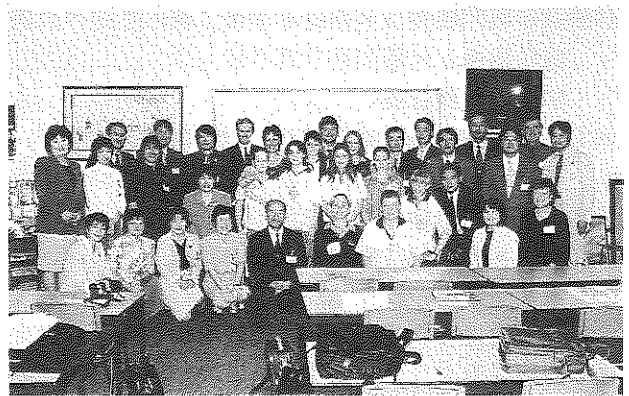
- ・高校を卒業後に就職する生徒が25%いる。これを2010年までに、10%まで下げたいという。また、このために職業教育にも力を入れている。
- ・コンピュータ教育に力を入れている。現在、コンピュータが生徒4人に1台の割合で設置されている。
- ・先住民（アボリジニー）がいる（オーストラリア全体で約5万人）ので、特別な教育プログラムを実施している。
- ・小学校3年生から、日本語、インドネシア語、イタリア語、ドイツ語などの外国語を学ばせている。
- ・砂漠の緑化、塩害の問題など環境教育に積極的に取り組んでいる。
- ・校長の権限が強い。施設、設備の管理はもちろん教職員の雇用も校長が行っている。契約制であり、これが日本とは大きく異なる点である。

① では、まず、ヤラワガ中・高校での研修について説明します。

この学校は、生徒数375名の、中高一貫校です。正規の教員が32名で、補助教員が9名いました。

- ・どこでもそうだが、10時か10時半頃になると、ティータムがあった。（小・中・高校で）
- ・自由で明るい雰囲気の中で、生徒たちは伸び伸びと学習していた。

- ・生徒たちの学習意欲を高めるために、選択学習が盛んに取り入れられていた。その際に、地域の専門家を積極的に活用していた。
  - ・保護者の学校教育への関心は高く、奉仕作業などの環境整備にも快く協力してくれるという。
- ② 次に、ビーチワース中・高校を御紹介します。ここも、中・高一貫校です。ヴィクトリア州では、ほとんどが中・高一貫校でした。生徒数340名、正規の教員が31名、補助教員が6名いました。
- ・都会の生徒と違い、穏やかな性格の子ども、いわゆる子どもらしい生徒が多かった。
  - ・英語での「読み書き能力を高めること」に相当力を注いでいた。これは、ヴィクトリア州のどこの学校でも感じたことであった。（日本の国語教育を振り返ってみて、危機感を感じた。）
  - ・授業に対する興味、関心、意欲などを高めるため、特に科学、社会科、テクノロジーの三科目については、特別の戦略を講じているという。
  - ・芸術教育に力を入れている。音楽や美術の他に演劇活動も重視し、毎年1回、町の劇場で入場料を徴収して上演するという。
  - ・学校管理委員会というものがあり、学校運営に関わる全てのことを話し合うという。その中に生徒の代表も入っていたのには驚いた。



『ビーチワース・中・高校』にて

### 〔編集後記〕

相対評価から絶対評価に変わり、評価に明け暮れた1年だったような気がしますが、各学校ではいかがだったでしょうか。本県出身で昨年、名誉県民に選ばれた倉澤栄吉先生（現在全日本国語教育学会の会長）の講演会で、「絶対評価は子ども一人一人の尊厳にまで関わるものだ、という認識でやってほしい。」「確実に言えることの一つに、教師の子どもを見る目が肥えてきたことを挙げたい。」というお話をされていました。参考にさせていただければ幸いです。

間もなく卒業式です。各学校では、その準備が着々と進んでいることでしょう。生徒はもちろん保護者にも感動的な卒業式にしたいものです。（橋本）